

防災・減災

で地域をつなぐ

2011 みたかちゅうおうプロジェクト—防災教育—
実践報告



みたかスクール・コミュニティ・サポートネット

(平成 23 年度文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究」)

はじめに

私たち「みたかスクール・コミュニティ・サポートネット」は、三鷹中央学園と三鷹中央学園コミュニティ・スクール委員会の事務的なサポートをする実働部隊として平成 23 年 4 月に設立された任意団体です。平成 23 年度文部科学省委託事業「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究」に申請、採択されました。

この事業は、文部科学省が事業委託先と、地域社会それぞれの実情に合わせて住民が協働して解決していくことを促す「仕組みづくり」を進める実証的共同研究を行い、取組後、様々な地域で活用され、地域の教育力の向上に資する取組モデルを構築するものであり、私たち「みたかスクール・コミュニティ・サポートネット」は、三鷹市のコミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育を進める中で、地域のさまざまな人財や地域団体をつなぎ、中学生を中心とした子どもたちの育成、生きる力をもった子どもたちの育成を目的に、学校を核とした地域づくり＝スクール・コミュニティを推進するための拠点の構築をめざし、テーマを『地域防災教育』『キャリア教育』『学習支援』の3つに設定し、実践を通して本団体が地域と学校との架け橋となる可能性について「みたかちゅうおうプロジェクト」と題して取り組んでまいりました。

とくに『地域防災教育』は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災以降、私たちの防災に対する意識の高まり、学校が防災の拠点として果たす役割など、地域と学校をつなぐテーマとして早急に取り上げるべき課題であると考えました。

その中で実践した「もしものときのハンドブック in みたかちゅうおう」の作成について触れるとともに、「3.11 地域防災を考える日 in みたかちゅうおう」の開催についての実践報告とそこから見えてくる「わたしたちにできること」、今後の課題等について私たちなりに感じたことをご報告させていただきます。

私たちは教育のプロでも防災のプロでもありません。報告も専門的なものではありません。ごく普通のお母さんの素人集団が「子どもたちのためにできることをやってみよう」というたった一つの揺るがない理念の下に、大人としてできることを考え、一つ一つ手作りで実践してきたことを皆様にお伝えできれば幸いです。

平成 24 年 3 月 みたかスクール・コミュニティ・サポートネット
共同代表 四柳 千夏子
共同代表 師橋 千晴



「3.11 地域防災を考える日inみたかちゅうおう」開催の経緯

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分。福島・宮城・岩手の太平洋沖を襲った大地震と巨大な津波。東日本大震災は東北地方の太平洋側に甚大な被害をもたらしました。大いなる自然の前に人間はあまりにも無力でした。

三鷹市内も震度 5 弱の大きな揺れを感じました。子どもたちの多くは学校におり、大きな被害はありませんでしたが、緊急集団下校をした子ども、学校で保護者に引き渡された子ども、保護者が帰宅困難者になり、学童保育所で不安な時間を過ごした子どもなど、その後の生活の混乱も含めて、日ごろからの心の備えや危機感をもった訓練、人とのつながり、家族での話し合いなどがいかに大切なことかを誰もが感じました。

また、被災地の報道などで、避難所で健気に働く小中学生がまさに地域の復興の担い手として大きな役割を果たしている姿に、私たち大人が責任をもってやらなければいけないことは、もしものときに子どもたちの命を守ることと同時に、子どもたち自身が地域防災の担い手として守る側の人になるよう育成することだと強く感じました。

そこで私たちは自ら防災について学んでみようと、実際に学区内を見て回ったり、様々な防災施設を見学したり、いわば防災についての調べ学習を試みることにしました。そして自分たちの学んだ成果や気づきを「もしものときのハンドブック in みたかちゅうおう」としてまとめることにしました。

さらに子どもたちが三鷹中央学園の児童・生徒、保護者、先生だけでなく、広く地域の皆様に「一緒に学ぶ」「一緒に考える」きっかけづくりになる場として「3.11 地域防災を考える日 in みたかちゅうおう」を開催しようと、約 4 か月間、一つ一つ手作りで企画を重ねてきました。

「もしものときのハンドブックinみたかちゅうおう」の作成

まず何から始めたらいいのだろうか？私たちは三鷹市防災課を訪ねました。遅ればせながらそこで初めて三鷹市が作成・発行している「三鷹市防災マップ」が全戸配布されている、ということを知りました。調べれば調べるほど防災については三鷹市、東京都、内閣府等様々なところで防災マップ、ハザードマップや防災についての知識・情報を発信していることがわかりました。これはプロの領域です。私たちがやる必要性は無い、といったんは思いました。

(三鷹市わがまちマップ <http://www.2.wagamachi-guide.com/mitakacity/>)

しかし、それらをよく見ると一般論が多く、かゆいところに手が届きそうで届かない、そんなもどかしさを感じました。これだけ情報があふれていても、実際にあの日に体験した不安やおそれ、精神的なパニックは解決しないのではないか？学校にいるはずの子どもたちは無事なのか？私たち親は迎えに行くべきなのか？家で待っているべきなのか？一般的な防災マップはすでにあります。必要なのは「母親目線の現場力」です。私たちは、まず自分たちの学区の中を歩いてみることにしました。



日常生活している場所も、「防災」という視点で見ると、近所の公園に消防車専用の採水口があったり防火水槽があったりすることに気づきました。見上げてみれば鉄塔が。震度7だとこの鉄塔はどうなるのでしょうか。

そのほかにも、知人宅に震災用井戸があることや駅前の商店にはAEDが設置されている店があること、商店会で防災無線装置を設置していること、大震災で建物が倒壊したりすれば通れなくなるような狭い道、危険なブロック塀、逆に一時的に避難するのに適していそうな生産緑地など、もし子どもを学校に引き取りに行かなければならないとき、どのルートを通るべきなのか、何気なく生活している街並みも時には「防災」という視点で見るとまた違った見え方をするものなのだとすることに気づきました。

自分たちが実際に見たものから、さらに調べて知識を深めたり、神戸「人と防災未来センター」や「そなエリア東京」（東京有明）を視察して学んできた知識や得た情報をみんなで一つ一つ選別し、編集して「もしものときのハンドブック in みたかちゅうおう」ができあがりました。コンセプトは「家庭で話し合うためのきっかけに」。親子でもしものときのことを話し合っ「我が家の決め事」を家族で確認しあう際の際の材料として活用できるよう、三鷹中央学園の各家庭に子ども用 1 部、保護者用 1 部を配布しました。

2011 みたかちゅうおうプロジェクト「防災教育」実践報告一

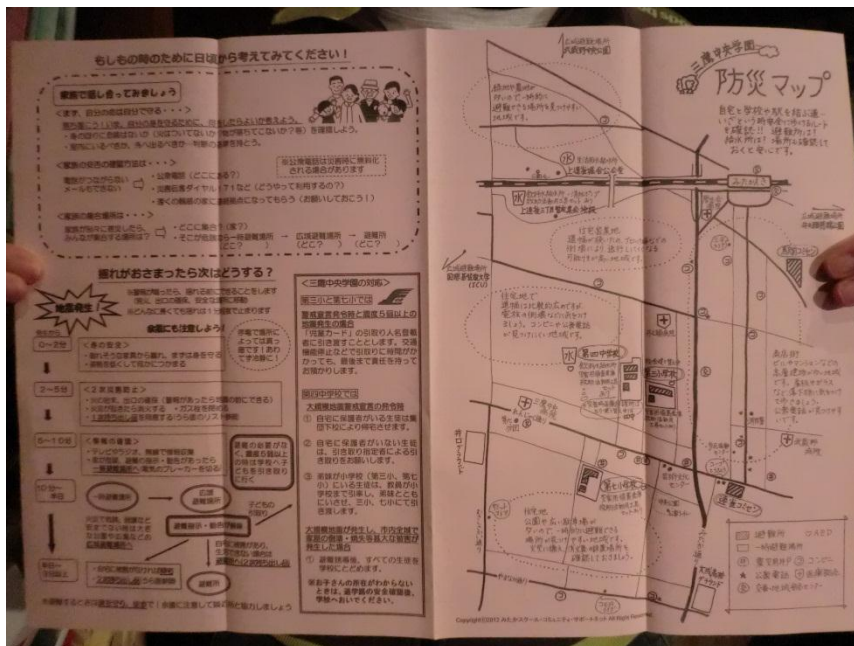
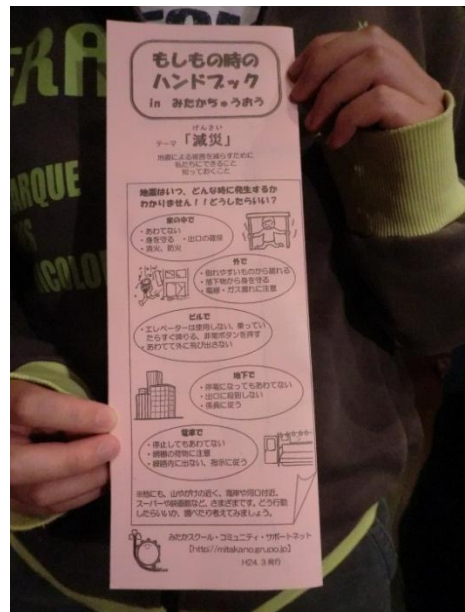
平成 23 年度文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究



この街歩きの白地図が・・・

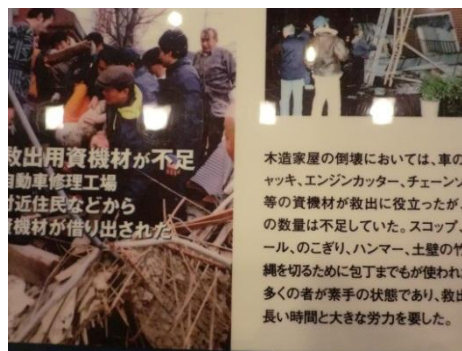
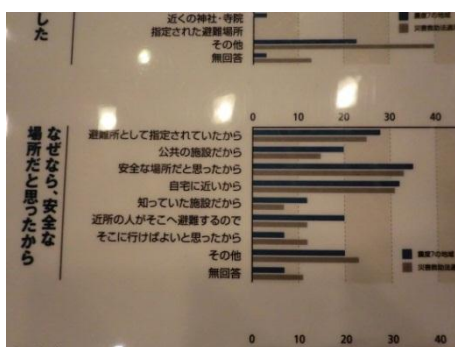
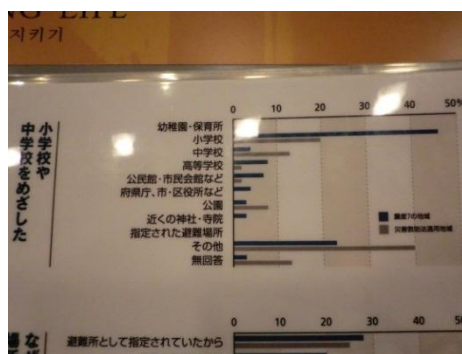
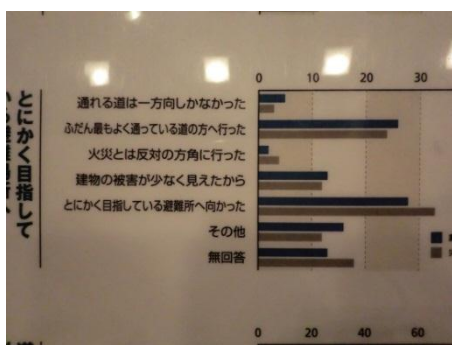
・・・「もしものときのハンドブック in みたかちゅうおう」になりました。

避難所運営マニュアル簡易版と大きさをそろえました。



「減災」との出会い（「人と防災未来センター」視察報告）

1月12日（木）、スタッフ4名で神戸にある「人と防災未来センター」を視察、防災について学んできました。

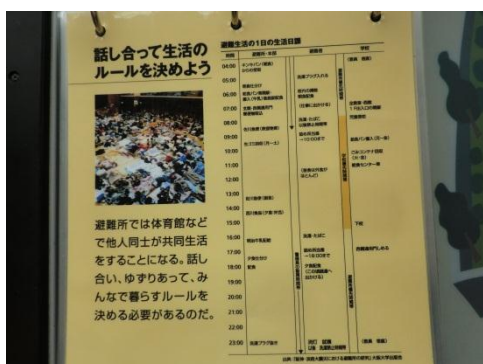
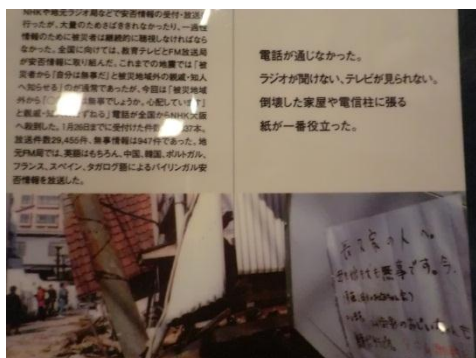


1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災の記憶を風化させることなく震災の教訓を次世代へ継承するための施設「人と防災未来センター」は、映像による体験のほか、当時の被災された人々の生々しく切迫した思いを大変細かくアンケート調査しており、ここでしか見られない多くのデータが展示されていました。明け方まだ暗いうちに起きた直下型地震の恐怖、市民の混乱した状況などがアンケート結果からも伝わってきました。

倒壊した家屋をどかしたりするときに役立つ工具の展示や避難所生活での苦労や工夫などを見ていると、このときの経験から得た教訓によって、今の学校防災倉庫内の物資、機材等が整備されているのだ、ということがわかります。

2011 みたかちゅうおうプロジェクト「防災教育」実践報告一

平成 23 年度文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究



また、避難所生活が始まってからのことも克明に記録されており、現在三鷹市内小中学校に設置される「避難所運営マニュアル」もこのときの経験がもとになっていることがわかります。

日ごろの備えについても情報が整備されており、家庭用災害持ち出し袋の中身一覧等役立つ情報を学んで来ることができました。その日、地元の中学生在が校外学習をしており、彼らが見学している様子を見ていると、たとえ地元の子どもでも生まれる前の出来事であり「過去の出来事」になりつつあることを感じ、復興を遂げた証拠でもありますが、同時にしっかりと次世代に伝えていかないといつか風化してしまう怖さも感じました。

神戸で、私たちは初めて「減災」という言葉に出会いました。自然災害は未然に防ぐことはできません。しかし、私たちが正しい知識を学び、備えをすることで被害を最小限に減らす、つまり「減災」は人間の力で可能になる、という考え方です。住民一人一人の意識、地域の絆、日ごろの備えが自分たちを守り、子どもたちを守る大きな力になることに神戸の地であらためて気づきました。これなら私たちにも取り組みそうです。

「そなエリア東京」見学報告

1月31日(火)、スタッフ9名で東京臨海広域防災公園内に建つ防災体験学習施設「そなエリア東京」に見学に行きました。



1階の防災体験ゾーン「東京直下72h Tour」では、マグニチュード7.3、震度6強の首都直下地震が起きたとき、どのように避難するのかをニンテンドーDS®を使ったクイズに答えながら、生き抜く知恵を学ぶ防災体験学習ツアーです。

薄暗い中に地震で壊れた商店街のジオラマが再現されており、その中をDSに次々と現れるミッションをクリアしながら進みます。

ただ展示してあるだけだと素通りしてしまいがちですが、このような方法だと見るべきポイントが分かりやすく、子どもも夢中になって見るだろうな、と見せ方の工夫に感心しました。



シネマステーションでは、地震の際、転倒防止の対策をしていない家具がとんでもない凶器になることを思い知らされました。



転倒防止対策をしていない部屋



転倒防止対策をした部屋

2011 みたかちゅうおうプロジェクト「防災教育」実践報告一

平成 23 年度文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究

2 階の防災学習ゾーンでは、様々な防災グッズが紹介されていました。

食料や水、懐中電灯やラジオなどは誰もが思いつくとこですが、避難所生活が長引いた時、子どもたちのストレスを少しでも和らげるために、子供用の非常持ち出し袋には、クレヨンやお絵かき帳、トランプやゲーム、ぬいぐるみなどを入れておくといい、という提案は斬新でした。



3.11地域防災を考える日の「日ごろの備え」展示コーナーでも、このアイデアを取り入れ、子供用非常持ち出し袋の提案をしました。

また、災害時、物資の乏しい中でも、身の回りのものと知恵を使って、足りないものを作り出す知恵や技のヒントもたくさん得ることができました。



地盤液状化現象が一目で分かる実験ボトル「エッキー」(独立行政法人 防災科学技術研究所)を知ったのもここででした。身の回りにあるもので簡単に作ることができ、しかも言葉は知っているけれどよくわからなかった地盤液状化が一目瞭然! 3.11のイベントでも是非みなさんに見てもらいたい!



3.11のイベントを実施するに当たり、様々なアイデア、知識を得ることができた、実りの多い見学でした。

「釜石の奇跡」を学ぶ（文部科学省シンポジウム基調講演要旨）

震災対応を通じて考える地域とともにある学校づくりフォーラム

～平素からの学校と地域の関係づくりが子どもたちを守り、地域を守ることにつながる～

●基調講演

「防災教育を通じて考える地域づくり」 群馬大学大学院 教授 片田 敏孝氏

・主な著書



「みんなを守るいのちの授業 ～大つなみと釜石の子どもたち～」 NHK出版

「子どもたちに『生き抜く力』を ～釜石の事例に学ぶ津波防災教育」 フレーベル館

- 今回被災した岩手県釜石市。市内の小学生1,927人、中学生999人のうち、犠牲になった児童生徒は5人。その5人は学校を欠席していたか、保護者に引き取られて帰った子どもたちであり、学校管理下にあった多くの子どもたちが無事だった。その生存率は99.8%であり、「釜石の奇跡」とも言われている。

奇跡を生み出した、「奇跡」ではない津波防災教育の実践

平成16年より、片田先生による釜石市内小中学校での津波防災教育



基本の信念

大いなる自然の営みに畏敬の念を持ち、行政に委ねることなく、自らの命を守ることに主体的たれ。

釜石の子どもたちの命を救った「避難三原則」

「想定にとらわれるな」

「その状況下において最善を尽くせ」

「率先避難者たれ」

「想定にとらわれるな」

そもそも「想定」とは誰が何をもとに設定したのだろうか？行政は、津波のハザードマップを作成しているが、自宅がハザードマップ上で浸水想定区域内か外かで一喜一憂するのか？実際、今回の震災での津波被害は、作成されていたハザードマップを大きく超える規模だったが、それは「想定外」のことなのだろうか？

⇒相手は自然。人間の作り出した「想定」をはるかに超える事態も当然あり得る。

「その状況下において最善を尽くせ」

釜石の海には世界一の堤防が造られているが、「もうこれで安心、津波が来てもこの堤防さえあれば逃げなくてすむ」のだろうか？果たして、今回の津波でこの堤防は壊滅的な被害を受けた。これまで過去に幾度となく津波被害を受けてきたにもかかわらず、津波警報が出て「逃げなくても大丈夫」と避難しないことが常態化していた。

⇒大いなる自然の前に人間は無力だ。だからこそ、その中で最善を尽くすことが大切。

「率先避難者たれ」

非常ベルが鳴っても自ら逃げようとしするのはなぜなのか？「前も大丈夫だったから今度も大丈夫だろう」「みんなも逃げないし・・・」と「自分は大丈夫」と思う、あるいは思おうとしているだけ。それは「逃げない」という意思決定をしているのではなく、「逃げる」という意思決定ができないだけなのだ。

⇒本当の敵はキミ自身。何があっても自分が一番先に助かれ！人を助けるためにはまず自分が生きなければならないのだ。逃げる勇気があれば周りにいる人たちもつられて逃げようとする。逃げる行為そのものが周りの人の命を守ることになるのだ。

そして授業の最後に子どもたちに託すこと・・・

「これでキミたちは大丈夫、生き抜ける。じゃあ、お母さんたちはどうだろうか？キミたちを心配して自分が逃げることを後回しにしてしまうだろう。家に帰ったら次のことをお母さんに宣言してほしい。

「お母さん、ぼくはちゃんと逃げるからね、だからお母さんも逃げてね」

子どもたちがそう宣言したら、お母さんたちは子どもたちに次のことを語りかけてほしい。

「そう、ちゃんと逃げてね」・・・子どもたちが自発的な行動をとれるようになるには子どもの発案を否定しない。

「じゃあ、お母さんも逃げるね」・・・「津波てんでんこ」※の教えのように親も必ず逃げてくれる、と子どもが安心すれば親を心配することなく自分が逃げることに専念できる。

「あとで必ず迎えに行くね」・・・必ず再会できる、という安心感を与える。

■「津波てんでんこ」

この地域には昔からの言い習わしで「津波てんでんこ」という教えがある。「てんでんばらばらに、家族のことさえ気にせず一人で避難せよ」という意味だが、家族がそれぞれ避難していることを信じあえる絆がなければとてもてんでんばらばらに逃げることなどありえない。「津波てんでんこ」には、自らの命に責任を持つこと、家族との信頼関係を築くこと、という深い意味合いがある。

子どもたちへの防災教育

防災に対して主体的な姿勢を醸成する

してはならないこと

- ・脅しの防災教育・・・怖いことをすりこんでしまうと、地域が嫌いになってしまう。
- ・知識の防災教育・・・主体的な姿勢がないまま知識のみを与えることは想定にとらわれてしまう。
- ・子どもの声を否定する・・・子どもたちの判断や声を否定すると主体的な姿勢は生み出されない。

地域への波及と災害文化としての定着

- ・家庭への浸透・・・保護者の世代は生活に追われ、防災講演なども参加が少ない。子どもを介して親の関心を引き出す。
- ・釜石に住むということは・・・海産物など自然の恵み豊かなこの地に住む、ということは、自然の営みに近づくことであり、同時に自然の災いに近づくことである。津波防災は、自然の恵みを享受するための「お作法」である。
- ・この子たちがやがて・・・今、防災教育をうけている子どもたちは10年後には大人になり、20年後には親になる。そしてその子どもたちにもこの姿勢は受け継がれていく。そうやって釜石の防災教育はこの地域の中で醸成し、地域住民であるならば誰もがもつべき知識＝災害文化としての定着をめざすものである。

「釜石の奇跡」参考リンク

群馬大学広域首都圏防災研究センター

<http://www.ce.gunma-u.ac.jp/bousai/research02.html>

河北新報社ニュース

http://www.kahoku.co.jp/spe/spe_sys1071/20111126_01.htm

防災を話し合う「熟議」

三鷹中央学園コミュニティ・スクール委員会では、防災について「熟議」をしました。「熟議」とは、文部科学省が提唱している話し合いの手法で、お互いの意見を共有しながら議論を深めていきます。一般的に会議や議論の場になると主張の強い人や日ごろからリーダー格の人の意見ばかりが通りがちですが、「熟議」は全員が意見を出しやすく、また結論を導き出すというよりも意見の共通理解が中心なのでメンバーの相互理解を深めるのに適しています。（「文科省熟議カケアイ」 <http://jukugi.mext.go.jp/>）

12月1日のコミュニティ・スクール委員会の熟議のテーマは、

「3.11 東日本大震災に学ぶ ～私たちにできること～」

学園にかかわる PTA や青少年対策地区委員会、交通安全対策地区委員会、主任児童委員、民生児童委員、保護士、町会・自治会、地域子どもクラブ、地域コーディネーターなどから成るコミュニティ・スクール委員のメンバーが、それぞれの立場から防災について「私たちにできること」「子どもたちにしてほしいこと」など議論を深めました。サポートネットもこの熟議に参加しました。



この熟議の中で、「子どもたちの意見を聞きたい」、「子どもたちにも防災について語ってほしい」という意見が出ました。

2011 みたかちゅうおうプロジェクトー「防災教育」実践報告ー

平成 23 年度文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究

そこで、学園の各学校（第三小学校、第七小学校、第四中学校）にお願いして、「三鷹中央学園子ども熟議」を行いました。小学 5 年生から中学 2 年生までの 20 人が熟議に参加してくれました。テーマはコミュニティ・スクール委員会の熟議と同じ、

「3.11 東日本大震災に学ぶ ～私たちにできること～」 です。

コミュニティ・スクール委員がファシリテーターとして、サポートネットがアシスタントとして参加しました。まずは 3.11 のあの日、どんな体験をし、どんな気持ちになったかを思い出してもらいました。次に「自分たちにできること」、「大人にしてほしいこと」などについて議論を深めてもらいました。



「ふだんから近所の人と仲良くする」、「友達がパニックになっていたら落ち着かせる」、「避難訓練をまじめにうける」、「大人の言うことを聞く」、「大人と協力する」、「地域を知るための授業」など、子どもたちからはすぐにでも実現できそうなアイデアや素晴らしい意見がたくさん出ました。初対面のメンバーでしたが小学生と中学生が意見を共有できたことも大きな収穫でした。

子どもたちから出たたくさんの意見を具現化していくことが、次の私たちに課せられた課題となりました。

「3.11 地域防災を考える日inみたかちゅうおう」の実施

これまでの防災についての学びや気づきなど私たちが積み重ねてきたものを、学園の児童・生徒、保護者、先生、地域の方に知っていただくために、またそれによって地域の人々の新たなつながりの場を作るきっかけづくりとして、さらには被災地に思いを馳せ、犠牲になった方々の冥福と被災地の一日も早い復興を祈るためのイベントとして「3.11 地域防災を考える日 in みたかちゅうおう」を開催しました。

- 日時 平成 24 年 3 月 11 日（日）午後 1 時より 4 時 30 分まで
- 会場 三鷹中央学園三鷹市立第四中学校
- 後援 三鷹市／三鷹市教育委員会

当日は、外部協力者として三鷹市管工事業協同組合、篠原秀和さん（五小避難所運営連絡会）、竹上恭子さん（みんなのブックカフェ）、吉野恵蔵さん（ハンドベル奏者）、K〜ベルマモン、（有）日の丸防災、共和商事（株）、地域協力者として中井禮さん、三地区有志、三小 PTA、七小 PTA、四中 PTA、三小わいわい広場、七小あそびバナナ、三小おやじの会、七小おやじの会、三鷹中央学園小中学生有志、三鷹中央学園、三鷹中央学園コミュニティ・スクール委員会など多くの方々のご協力をいただき、小中学生も含め 400 人近い来場者がありました。



三鷹市管工事業協同組合の皆さんによる
災害時飲料水給水所設置訓練



水汲みや水運び、試飲を実際に
体験してみる



2011 みたかちゅうおうプロジェクト「防災教育」実践報告一

平成 23 年度文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究



かまど設置、炊き出し訓練：
三小おやじの会、七小おやじ
の会



アルファ米の試食をしながら、その作り方を学ぶ
作り方指導：三地区有志のみ
なさん



企業の協力も得られた



中学生ボランティアスタッフ
自主的に申し込んでくれた中学生は
将来の地域の担い手



停電のときも生活の知恵で
廃油を使ったエコキャンドル
ビンに願いをこめたメッセージ
を書いてもらった



液状化現象のしくみがわかる実験
子ども学芸員が説明してくれた

エコキャンドル指導：竹上恭子さん

2011 みたかちゅうおうプロジェクト「防災教育」実践報告一

平成 23 年度文部科学省「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究



私たちが学んだ成果を展示



この日は三鷹市防災課の協力で、防災倉庫内も開放



14 時 46 分、東日本大震災で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りし全員で黙とう



約 200 個のエコキャンドルに火をともした



ピアノ&ビオラ：
野田なつ代先生、
河口奈美さん、
ハンドベル：
吉野恵蔵さん、K
〜ベルマモン
の皆さんによる
ミニコンサート



手記の朗読：片岡奈緒美さん



防災講話講師：篠原秀和さん

もし、学校が避難所になったら～第四中学校の場合～(防災講話要旨)

講師：篠原秀和氏（五小避難所連絡会）

- 災害発生直後、火災などの二次災害から逃れる為、一時的に避難する場所。
- 避難した人の安全を確保できるスペースを持った公園や学校の校庭などが指定されます。
- 地域による避難先の指定はありませんので、近くの避難先を確保しておく。

一時避難場所とは？

防災マップなどで見かける「一時避難場所」と「避難所」、「広域避難場所」は違うものです。その違いを知っておきましょう。

第四中学校の近隣の一時避難場所は四中のほか、七小、井口特設グラウンド、大成高校、四小のいずれも「校庭」です。同じ敷地内でも、校舎は一時避難場所ではありません。また、平成 24 年 3 月現在、第三小学校は校舎建て替え工事のため校庭がありませんので一時避難場所ではありません。

- 四中校庭
- 七小校庭
- 井口特設グラウンド
- 四小校庭
- 大成高校校庭

近隣の一時避難場所

- 大規模災害が発生し、一時避難場所にも火災による延焼がせまっている場合など、もはや近くの避難場所では危険であると判断した場合に避難をする場所です。

広域避難場所とは？

第四中学校エリアで最も近い広域避難場所は井の頭公園になります。文化園・西園・御殿山エリア・ジブリ周辺が指定されています。池の周辺は地形の面から広域避難場所には指定されていません。

近隣の広域避難場所(下連雀・上連雀地区)

- 国際基督教大学
- ルーテル学院大学
- 東京神学大学
- 野川公園
- 国立天文台大沢グラウンド
- 神代植物公園
- 武蔵中央公園（上連雀1丁目）
- 井の頭公園（池の周りは指定外）

- 災害により自宅が倒壊してしまったり、自宅での生活が困難になってしまった場合、またこれから災害にあう危険性が大きい場合などに、一時的に避難生活をおくる為の場所。
- あわせて食料や生活物資の配給などを行う拠点としても機能する場所。
- 市内各学校やコミセンなど、**屋根のある施設**が指定されます。

避難所とは？

自宅が危険な状態になり生活が困難な場合、一時的に生活を送るための場所が**避難所**です。自宅が生活するのに支障が無い場合は、できるだけ自宅で過ごすことをお勧めします。避難所は食料、水、生活物資の配給の拠点、情報拠点などにもなります。

第四中学校の近隣の避難所は四中のほか三小、七小、四小、駅前コミセン、連雀コミセン、井口コミセンなどです。第一中学校は三鷹市の防災関連の活動拠点となるため、避難所には指定されていません。

- 四中
- 三小
- 七小
- 四小
- 連雀コミセン
- 駅前コミセン
- 井口コミセン
- 注意；一中は避難所ではありません！

近隣の避難所

発災から避難所開設まで

開校時と閉校時

大規模地震が発生！まずは自分の命を守らなければなりません。揺れがおさまるまでは頭を守り安全な場所へ。火災防止のため、必ず火の始末を確認しましょう。

学校では！ 自宅では！

- 机の下に隠れて揺れがおさまるのを待ちその後、先生の誘導で校庭に避難。
- 揺れがおさまるまで安全な所に隠れる。
(火の始末を忘れずに)

地震発生直後

- 学校の引取り手順にそって、子どもの引取り。
(学校指定の手順)
- 自宅に戻れない状況の場合は引取り後、移動して待機。
(一時避難場所)

この時一般の一時避難者となります。引取り後は、**保護者の責任**で子どもの安全確保をして下さい。

保護者が引取りに来れない子どもは、保護者が来るまで先生が指定の場所で見守っています。

児童引取り！

揺れがおさまり自分や家族の安全が確認できたら、学校が指定している引き取り手順に従って学校に向かいましょう。家を出るときはブレーカーを落とし、鍵を忘れずに施錠しましょう。できるだけ通学路を徒歩で。倒壊箇所は無いかな、被害の状況はどうかなど確かめられるようなら確かめながら学校へ。近所の状況を学校に報告すると学校が情報の拠点にもなります。

ふだん引き取り訓練をしているのとは状況が一変し、近隣住民が避難してきて校庭はごったがえしている可能性もあります。三小の児童、四中の生徒、一般の避難者などのエリア分けが必要です。また、七小に弟妹のいる四中生は、七小に向かっている場合があります。



四中校庭・(引取り場所を確認しておく)
三小・四中・一般避難者

閉校時の場合

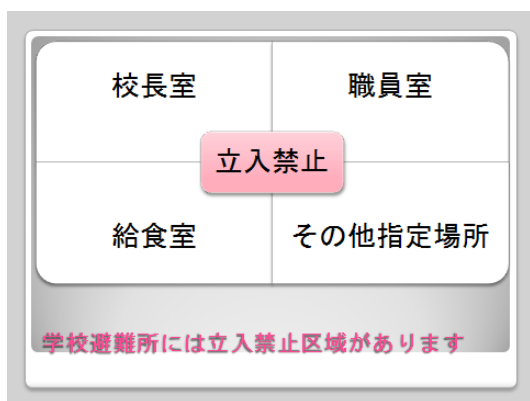
(学校がしまっている時、又は先生が勤務していない時)

夜間や土日など、学校が閉まっている、あるいは先生がいない場合、学校ごとに正門の鍵を持っている地域の人が複数名決められています。駆けつけた人が門を開錠します。その後、避難所運営委員会が立ち上げられ、所定の手続きに基づいて避難所が開設されます。

学校に避難者が集まってきたからといって、学校が勝手に避難所になるわけではありません。三鷹市災害対策本部からの指示があって開設されるのです。

必要に応じて 避難所開設！

- 避難所運営委員会の立上げ
- 建物の安全確認
- 三鷹市災害対策本部への連絡 (情報提供)
- 避難所開設の指示にしたがい開設。



また、避難所になったからといって、すべての教室、施設を開放するわけではありません。校長室や職員室、給食室など定められた立ち入り禁止区域があります。

お隣の第三小学校は、災害時医療救護所に指定されています。ただし、平成 24 年 3 月現在校舎建て替え工事のため、医療救護所は第四中学校に設置されます。

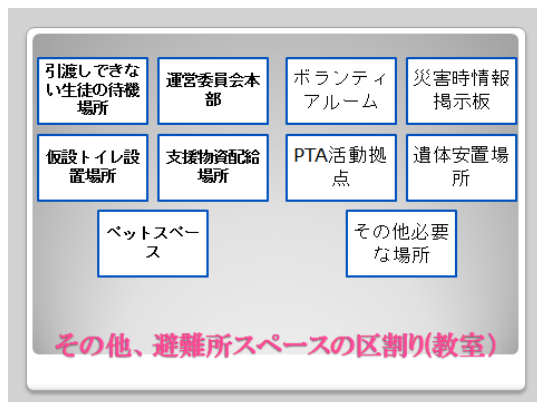
医療救護所

- 基本的に保健室

医療救護所用スペース

- 保健室に隣接した教室など

三小完成までは、四中に医療救護所設置



そのほか、避難所になるとさまざまな人が集まるために、教室の区割りが必要になります。指定されている場合もありますが、避難所運営委員会の話し合いによって決められていく場合もあります。避難所である学校は、同時に子どもたちの教育の場として授業を再開させるときのことを考えて施設利用する必要があります。

学校には防災倉庫が置かれており、災害支援物資が入っています。備蓄内容は学校によって違いがあります。第四中学校の場合は、お隣の第三小学校の防災備蓄倉庫とあわせての使用ができます。



基本的に使用許可 が必要	生徒優先ではない
注意！	
限られた物資しか ありません	鍵は学校にもあり ます

防災倉庫の使用について

防災倉庫は学校の中にありますが、学校のものではありません。学校が勝手に使用することはできませんし、児童生徒が優先的に物資の支援を受けられるわけではありません。

避難所を運営するのは自分たち。避難者はお客様ではありません。決められたルールを守り、限られた物資を助け合い分け合わなければなりません。また、避難所では中学生などが担い手として力を発揮できるよう役割を持たせることも大切です。

避難所運営

- ルールを守って助け合い。
- ない物はない！ある物を上手く使って！
- 避難者はゲストではありません。皆で力を合わせて役割分担！！
- **中学生の力！（小学校避難所と大きな違いかも）**

自助

- まず、自分の命は自分で守る
- 工夫・準備・食料3日分・知識

共助

- 自分の周りの人を助け、共に生きる
- 家族・近隣・コミュニティ・他

公助

- 行政、他、公の助けをもらう。
- 公の立場で、市民を守る。

大切な心がまえ！

最後に！

- 発災直後の情報は自分の足で！と心がける。（携帯電話に頼らない）
- マニュアルを基本に、状況によって**柔軟な現場対応**。
- **想定外を想定する。**
- **避難者はゲストではありません。避難所はホテルや旅館ではありません！**
- **皆で力を合わせて役割分担！！**
- **子ども達の命は、私たちで守りましょう！**

ここからが第一歩！「防災・減災」で地域をつなぐ

「3.11 地域防災を考える日 in みたかちゅうおう」には多くの地域の方、ふだんは顔見知りでない四中近隣の方が多くご来場くださいました。ご来場いただいた方には、大変高評価をいただき、お褒めの言葉をたくさんいただきました。中には「こんなにいい取り組みをどうしてもっと宣伝しなかったのか」とお叱りをくださった方もいて、地域の皆さんの防災への関心の高さを目の当たりにしました。

すべてが手作りで内容も拙いものでしたが、私たちが一から学び、気づいたことを発表する、という点においては開催したことに意義があった、と思います。また、ご来場いただいた地域の皆さん、ご協力いただいた皆さんが、防災の拠点であり災害時の避難所にもなる学校で一堂に会し、防災・減災について考える場としてきっかけづくりの一助にはなったと思います。

しかし、これで終わっては単なるイベントでしかありません。これをきっかけとして、学校を拠点として人や情報がつながり、地域の輪を広げ、大人も子どもも共に学び、考え、行動していく「防災・減災」をテーマにしたネットワークを構築すること、子どもたちと共に学べる地域に根ざした防災教育プログラムを開発・実践することなどが今後の展望として考えられます。

おわりに

今回の防災についての取り組みについては、三鷹市防災課をはじめ、本当にたくさんの皆様にご協力をいただきました。直接的なご協力だけでなく、相談やアドバイスなど間接的なご協力を含めると 200 人近い皆様とお話をさせていただいたのではないのでしょうか。心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

東日本大震災は私たちにさまざまなものをもたらしてくれました。それはマイナスなことばかりではありません。節約し、環境に優しい生活をする人や人同士の絆、地域のつながりの大切さを今ほど感じることはありません。

大いなる自然の前に人間は無力です。自然災害を防ぐことはできません。けれども被害を最小限に防ぐ「減災」は、私たちの知恵と努力でやれるのです。今回の私たちの取り組みが、大人も子どもも一緒になってこの地域の防災・減災について考えるきっかけにしていただければ幸いです。

被災地の子どもたちが一日も早く元の笑顔を取り戻せますように。いつも通りの学校生活が送れるようになりますように。

おかあちゃんが創る
こどもたちの
未来へのかけはし

2012年(平成24年)3月発行

発行 みたかスクール・コミュニティ・サポートネット

URL <http://mitakano.grupo.jp/>

みたかスクール・コミュニティ

サポ-トネット